

世界インダストリアルデザイン会議
ICSID'73 KYOTO
の開催について

1972年5月

ICSID日本準備委員会

世界インダストリアルデザイン会議
ICSID'73 KYOTO
の開催について

1972年5月

ICSID日本準備委員会

目 次

I	会議の開催について	1
	会議の開催について	2
	会議の主旨と目的	3
	会議の性格と意義	7
	会議の目的と効果	11
II	会議の構成	14
	会議の構成	15
	会議の主題	18
	会議の日程	20
	会議の規模	21
III	会議の準備	22
	その準備	23
	その組織	25
	その予算	27
IV	会議の広報	28
	会議報	29
	会議資料	29
	議事録	29
	公式記録書	30
	その他	30
V	会議の関連事業	31
	展示会	32
	セミナー	33
	記念出版	33
	その他	33

会議の開催について

私たちは、1973年10月、東京ではじめて「世界インダストリアルデザイン会議」(CSID'73 KYOTO)を開催します。

この会議はICSID(International Council of Societies of Industrial Design=国際インダストリアルデザイン団体協議会)の総会および会議を日本において開催するもので、日本から加盟している三つの団体(日本工業デザイン協会、日本工業デザイナー協会、日本工業デザイン教育振興会)の協力を得て、関係者から構成される運営および実行組織によって行われます。

この会議は、現代の日本と世界に問われている人間の精神領域と物質環境、あるいは生活と産業の正しさをめぐり、新しいデザインを創り出すこと、そして、世界中の人々が集い、同じ道を歩む重要な機会です。

I 会議の開催について

- 会議の開催について
- 会議の主旨と目的
- 会議の性格と意義
- 会議の目的と効果

日本は、1973年をデザイン年として、デザインを社会生活の中心として、デザインを社会生活の中心とするこの運動に、「世界インダストリアルデザイン会議」を開催する機会を得ました。世界的な重要な活動として働きかけていかなければなりません。

この会議はしたがって、デザインを中心として生活のあらゆる面を改善し、すべての人々が、そのとも参加すべき重要な機会であります。

*1 社団法人 日本インダストリアルデザイナー協会 JIDA

通産省 製品科学研究所 JPRI

財団法人 日本産業デザイン振興会 JIDPO

会議の開催について

私たちは、1973年10月、東洋ではじめて「世界インダストリアルデザイン会議＝ICSID'73 KYOTO」を開催します。

この会議はICSID(International Council of Societies of Industrial Design＝国際インダストリアルデザイン団体協議会)の総会および会議を日本において開催するもので、日本から加盟している三つの団体^{*1}を母体に、ひろく日本中のデザイン諸団体と、関係者から構成される運営および実行組織によって行なわれます。

この会議は、現代の日本と世界に課せられている人間の精神領域と物質領域、あるいは生活と産業の正しいかゝりありあいという大きな問題を、日本に場を設けて世界中の人々が集い、問い直す貴重な機会です。

機械文明の高度な段階にたちいたった日本にとって、また世界にとって、今日はまさに大きく変身を遂げようとしている時点なのです。この時にのぞんで開かれるこの会議は、ひとつの時代の締めくゝりとなり、新しい時代に向けた出発の起点として、節を設けることゝなります。

日本はいま、73年をデザイナーとして、国民運動のレベルで大きい運動を展開しようとしています。生活をメインテーマとするこの運動に、「世界インダストリアルデザイン会議」は強力な滲透力をもった、先導的な重要な活動として働きかけていかなければなりません。

この会議はしたがって、デザインを中心として生活のとらえなおしを志さず、すべての人々が、ぜひとも参画すべき重要な機会であります。

*1 社団法人 日本インダストリアルデザイナー協会 JIDA
通産省 製品科学研究所 IPRI
財団法人 日本産業デザイン振興会 JIDPO

会議の主旨と目的

• ICSIDの世界性

ICSID(International Council of Societies of Industrial Design = 国際工業デザイン団体協議会)は1957年に結成され、現在35カ国^{*2}、57団体が加盟している国際的なデザイン運動の推進機関です。1959年より、隔年ごとに世界の各都市で、総会と会議を開催し、世界のデザイナーがそこに結集して、共通の課題の発見とその討議を重ねてきました。これまで、スウェーデン、イタリア、フランス、オーストリア、カナダ、イギリス、スペインの各国で行なわれています。

このように世界各国で会議が開催されるのは、各国の現実の姿を世界中の人々がじかに見つめることによって、共通の課題を発見し、その解決のための討議が具体性をもって行なわれると同時に、それがさらに国民的なレベルで、デザインのめざすものについての理解と関心が高められることを願っているからです。

このような活動にみられるICSIDの精神は、国連のめざす理念と軌を一にし、その支持を強く受けています。

• 日本で開催される意義

工業デザインの名において、世界会議がアジアを開催地に選んだことは、はじめてのことです。このように、機械文明の人類につきつけている課題が、はじめてグローバルな共通言語を必要とするにいたったことを立証しているとみることができます。

工業立国を遂げて次の時代の方向を摸索している日本にとって、この会議はICSIDの活動のめざすものからも、また産業社会における今日的な課題としても重要な意味をもっています。

*2

アルゼンチン、オーストラリア、オーストリア、ベルギー、ブラジル、ブルガリア、カナダ、中華民国、チェコ、デンマーク、フィンランド、フランス、ドイツ、東ドイツ、英国、香港、ハンガリー、アイルランド、イスラエル、イタリア、日本、オランダ、ノルウェー、ポーランド、南アフリカ、スペイン、スウェーデン、スイス、アメリカ、ソ連、ユーゴスラヴィア、インド、メキシコ、ニュージーランド、パキスタン

わが国でもこれまで多くの人々の努力によって、根強いデザイン活動、近代的生産方法による生活への文化の導入の活動がとどけられてきました。

今日、「物」をつくりだす産業は、生活環境を形成する大きな影響力を獲得しています。同時に、産業はその力を生活によりよく還元する方法の確立をデザインに協力を求めています。

豊かな生産力と高い技術を手にした日本が直面している未来の方向を探る、という問題をグローバルな課題として、デザインの世界会議が開かれることは、まことに時宜を得ているものであります。

• デザインの新しい使命

今やデザインは、生活を構成する個々の「物」と対しているだけでは、生活者の願いを具現する使命を果すことが難しくなってきました。広く社会の諸問題を総合的に把握することから、混乱した社会に秩序をみだし、そこから個々の「物」のあらたな姿を発見していくという新しいデザインのあり方が求められています。

個々の製品を美しくする術を獲得しても、そこに生活者としてのトータルな像が完成していなければ、納めるところがありません。現在、個々の「物」の美しさも、その働きも、すぐに住宅問題、交通問題、都市環境、産業公害の問題にゆきあたって、その効力を失ってしまいがちです。これらの問題は、「物」そのものゝ次元より上の次元からの取組みによって解決していかなければなりません。社会の活動のルールを規定する憲法によって人の世界が治められるように、「物」の世界は新しい美の憲法、もの相互の関係の規律、「物」づくりに秩序を求める「道」をうちたてることによって治められます。そうしてはじめて「物」それ自身を美しく存在させることが可能となるのです。

こゝにおいて、デザインは生活者を主体においた知恵と行動の統合がなってはじめて可能となる、という問題のとらえかたがクローズアップされてきました。

この、「物」の存在に向けられた新しい美の憲法をもってすれば、こどもにはこどもの「物」の世界が、おとなの愛情によってつくられるでしょう。老人の生活環境は、老人にふさわしい静かな豊かさをもたらすでしょう。病める人には身体と心の双方を助ける目的をもった道具が企画されるでしょう。またこの憲法は、技術の成果を、まっ先に身体障害者の失なわれた機能をみたすために用いることを命じるでしょう。

このように、現代文明を生活者の視座から見なおすとき、あらためてみいだされる諸局面を、世界インダストリアルデザイン会議に結集して討議することは、全生活者の願いであります。

- ニューライフをつくる

経済のすばらしい発展を遂げ、工業立国をなし遂げた日本において、それによって人々に満足を与えることができず、かえって量の世界に対する不満の声が高まっているのは、日本が文化国家としての長い歴史をもった民族の心を培ってきたからです。量の世界をマスターすることは、日本にとっては過程にすぎず、本来の面目は、量を基盤とした「質」の追求にあります。この志向が、デザイナーという生活者の運動にまで高められていくわけです。

工業化社会の上に、生活者の本来のすがたを築きあげようとするわが国の姿勢が、世界のデザイナーと膝をまじえて語りあうことによって世界の知恵に支えられ、そして世界に伝えられる貴重な機会です。これはまた、日本が世界の未来を築く運動をリードしていくことにもなりましょう。

日本の現代の課題は、インダストリーというすぐれた「物づくりの方法」を介して、新しい生活、新しい生きがいをつくりあげることにあります。

日本人は、生活そのものを求道にまで高めるほどに、生活を大切にす民族でした。茶道、華道、書道など、もろもろの「道」は、生活の中にあるさまざまな要素を抽出し、生活の味わいを高めようとする求道としての「生活道」でした。しかもこれらの「道」が、全国津々浦々まで、驚くべき幅の広さで続けられてきたのです。このことは、生活を高めたいという願いが、すべての人々のものであることを事実をもって証しています。

しばし、わたくしたちは、近代化という「物づくりの方法」にうちこんで、生活者としての願いをみずからふりかえることを怠ってきた観があります。その結果、さまざまの害がみずから降りそぐというまことに知恵のない姿を招いています。しかしながら、この状態を脱し、本来のあり方へ正そうとする意志が全国に満ちていることが今や誰の心にも感じられています。

諸芸道が即「生活道」でありえたのは、そこに物質領域と精神領域の統一が、つねに求められていたからです。「物づくりの道」の名人も、生活道の摸索にたえるすぐれた品物

や道具をうみだしました。「あきんどの道」の名人である豪商も、心の世界に目をひらくことによって海外に雄飛し、一国の文化の基礎となる芸道を支えました。世を治める大名が領土よりも名物の茶器を求めた事実も、歴史の語るところです。世を美しくしようとする願いは、工業立国を遂げた日本において、すべての行動の支えとして、今日、あたらしく活性化されていこうとしています。

- 新しい会議の創造

量の世界を築いた現代人にとって、それらの多様化した情報のインテグレーションを、人間性を主軸に実現していくことが、秩序を導く方法の主題となります。「世界インダストリアルデザイン会議」は、情報交流に新しい会議の創造を試みます。

会議におけるこの試みは、個人の生活者としての主体の参画こそ、いかに現実的な力を示すことができるかを立証する機会となります。

- あらたなデザイン運動の出発

「世界インダストリアルデザイン会議」は、産業と生活を生活者の視座から再編成し、生活者の思想の確立をめざすひとつの運動として行なわれます。

生活の再編成は、生活を支える産業の目的を明確にし、産業の再編成を導きます。生活と産業の再編成は、政治と行政の世界にも新しいフォーカスを求めます。こうして日本のすべての分野が一体となった、一国の再編成の運動が、デザインのプロモーションによって、国民運動としての大きさと拡がりをもって展開されるのです。

デザイン運動は、「物」の世界から、現代の社会のあり方を問い直す運動です。物と人との対話、精神と物質のインテグレーションをこゝろざす運動の主体は、すべての生活者にあります。なぜならこの運動は、本来、毎日の生活の主題であるものが、生活の名においてクローズアップされたものにほかならないからです。

このような大きい意義をもつ主題が正面からクローズアップされる機会が、関係各方面から賛意を受けて、多元な原動力を獲得しつつあることは、まことに喜ばしいことです。

わたくしたちはこの会議を成功に導くべく、準備委員会を設け、着実な活動つづけて参りました。愈々実行段階に移行するにあたり、わたくしたちは懸命の努力をつくす決心があります。各界諸賢の理解ある御協力、御支援を賜りたいと存じます。

会議の性格と意義

- 物は文化を伝える使節

日本は、世界中に向けてかずかずの品物を送りだしています。「物」は、地球上のどこへでも運ばれてゆき、それを受けとる人々に、それをつくった人間の姿を映し、心の香りを伝えていく性格をもっています。

それゆえ「ものづくり」の世界会議が日本でひらかれるということは、それまでに物を通じて交ってきた民族が、どんな背景から、どんな考えから、どんな摸索から、それらをうみだしていたかを、つぶさに見てもらい機会として意義があります。

物質に人工の手が加わると、物質は器物や道具の姿をとり、その意味は言葉の通じない人たちにも即座に伝わります。物はいかなる言葉よりも、もっとも雄弁で正直な、すぐれた外交官です。しかも、おびたゞしい数々の外交官であり、毎日の生活を助けることによって、地域を異にし、人種を異にした人々との対話を支えます。

「ものづくり」日本において、「物」に質を与える仕事としてのデザインがこれからの世界を考えていくうえで大事なポイントであることは、いうまでもありません。

- 思想、物、生活の三位一体

インダストリーが基調である世界にあって、デザインの世界会議は、すべての人々に共通な課題の討議の場として機能せざるをえない状況が、すでに地球を訪れているのです。

問題は世界的なひろがりをもった量としてとらえられ、課題は総合的な相貌をもち、主題は本質的なところへと深まらなければなりません。量と相と質をインテグレートする、これがこの会議の性質です。

この会議は、コミュニケーションの媒体として、「思想を媒体とする」会議、「物を媒体とする」交歓、「生活を媒体とする」対話を三位一体としたメディアの総合においてなされなければなりません。こゝに、世界会議の新しい方法が樹立されようとする試みが、この会議を大きく性格づけていきます。

- 各論をこえて

現代、産業と人間、生産社会と人間生活とのかゝわりは根深い問題であり、すべての解

決の試みが必ず他との関係によって壁につき当たっています。ここに、諸々の問題の根深いからみあいをつらさをトータリティによって解くために、今こそ本当の知恵が求められているのです。現代の視点とは、この意味で「各論」を超えたところで、すべてをすくいあげる大きな網をつくることにあるのです。

。 各大会のテーマ

このような課題に対して、これまで隔年ごとに開かれた ICSID 世界会議のテーマは次のように、それぞれ現代的な視点を持ち、解決への願いがこめられたものでした。

- 第1回 '59 ストックホルム会議 「インダストリアルデザインの国際的定義」
- 第2回 '61 ヴェニス会議 「社会におけるインダストリアルデザインの役割」
- 第3回 '63 パリ会議 「インダストリアルデザインにおける統一要素について」
- 第4回 '65 ウィーン会議 「デザインと公共」
- 第5回 '67 モントリオール会議 「人間から人間そのものへ」
- 第6回 '69 ロンドン会議 「デザインと社会、その未来」
- 第7回 '71 イビサ会議 「流動する社会とデザイン」

。 今回のテーマ

デザインの課題と、その解決みいだし努力がこのように続けられ、今回、その会場に日本が選ばれたのです。「世界インダストリアルデザイン会議 = ICSID '73 KYOTO」では、「物」に投影されている人間の姿をみきわめることによって、人間自身の姿をみいだし、という「物」と「人」との根源に立ち戻る必要があります。

人間のうみだした機械文明の活用のしかたに、知恵を用いていく方法を求めることをさしおいては、私たちは未来に光明をみいだしすることはできません。

。 現代の課題

近代は「ものづくり」の新しい方法によって築かれました。現代の諸問題に「ものづくり」の側からの発言を、社会に向けていく姿勢がぜひとも必要です。世界インダストリアルデザイン会議は、その発言の姿勢をもたなくてはなりません。

各国で行なわれた ICSID 世界会議のテーマは、それぞれがインダストリアル・エイジにおける諸問題をデザインの立場から把握し、デザインを社会に結びつけようとしています。

- 現代の特徴

現代人の多くは農業化社会に根をもった文化の集積を心のふるさととし、生活、習慣、風習はもとより、価値観さえも農業化社会のそれに立脚しています。そして私たちは、工業化社会に住み、しかも未来にむけて生活文化のヴィジョンを新しく築こうと試みているのです。これは非常に難しい問題です。

ここに、計画の学としてのデザイン、価値の学としてのデザインが、この難問を卒先して解きあかす使命を負っている意味があるのです。過去と未来の間に立って、過去の文化を否定するのではなく、むしろ過去の文化を未来につなげていく役割を負っています。ゆえにデザインの会議が、この全人間的な問題を問わなければならないのは当然でありましよう。

- インダストリアルデザインの意味

インダストリーをデザインする、インダストリアル・エイジをデザインする、ここに世界インダストリアルデザイン会議の性格があります。

これはインダストリアル・エイジの問題が、単にインダストリアルデザインの分野ばかりでなく、デザインのすべての分野にかゝることであり、またそれらをトータライズしていくことが求められていることを示しています。

- 地域性と国際性

この会議は、いかなる権威による制約も、いかなる組織の規制も受けることのない自由な討議の場としての性格をもっています。すべての参加者は、その国籍、人種、皮膚の色、あるいは宗教のいかんを問わず、同等の立場で会議に参加し、同等の発言権をもち、自由な意志で討議に加わることを保証されています。

この平等の立場の上では、すべての問題が共通の問題となります。これによって、地域的な問題が国際的な観点から克服されることが可能となります。地球をめぐる東西の問題、南北の問題、そこにもっとも普遍性をもち、またもっとも地域性の強い「生活のデザイン」の問題を抽出するとき、はじめて地球を丸いものとしてとらえることができます。地球を丸くするには、地球をデザインという共通の言葉で包むことによってはじめて可能です。

リージョナルな特殊性を、グローバルな普遍性によってつなげていく、これが生活のデ

デザインを軸とした世界会議の意義なのです。それぞれの国が、それぞれの生産や経済の機構をもち、独自の生活をもち、異った価値体系をもっています。各々に課せられるデザインの課題もまた、その背景にふさわしい特色をもっています。これらの地域から専門家が、各々がもっている方法論や考えを提示しあうことによって、それぞれが打ちたい壁を克服していく手段をみつけていくところに、この会議の意義があります。

私たちは、私たちの生活の姿を世界にむかつて開いてみせることによって、各国の人々の意見を謙虚に聞き、また示唆を与え、こゝに世界との互助の関係がうまれます。

。 新しい人間宣言

生活それ自体を対象とした世界会議、これが、科学技術はなやかな現代に対して、ひとつの新しい性格をもたせることになるといわなければなりません。いわば時代のテーマが、科学技術という方法論から「もの」をかゝげ、それらが構成する「生活」をかゝげる目的論に移る変革の契機です。別の言葉でいえば、これは科学技術に対する新しい人間宣言となる、といえます。

技術に対する人間宣言、これは、技術がもたらした高密度な環境を、人間的により豊かにしていこうという宣言です。技術をうみだした人間が、これを活用する段階に入ろうとする宣言になるのです。

このようにして、この会議は、世界の全生活者が新しい人間生活を求めていくために、ぜひ成功させねばならない会議であり、それがわが国において開催されることは、デザイナー運動の強力な推進力ともなりうるのです。

そして、この世界インダストリアルデザイン会議においてみつけられた新しい火が、世界のデザイン運動として、新しい豊かな人間生活をつくる運動として、世界のすみずみまで燃えひろがり、世界を動かす大きいエネルギーとなることを願っているのです。

会議の目的と効果

・ 会議の目的

世界インダストリアルデザイン会議＝ICSID'73 KYOTO が、変転点を迎えようとしている日本にとって、大きい意義をもっていることは、すでに述べたところです。時代は、古き時代の価値体系は崩れ、新しい体系はいまだ生まれぬ時にあり、その中の人間環境形成への努力の中に、デザイナーの積極的な役割を位置づけていくのが、この会議の目的です。

・ 京都で行なわれる意味

この会議が、現代諸問題の[・][・][・]るつぼである象徴的都市としての東京でなく、京都においておこなわれることに特筆すべき意味があります。

京都の街は長い年月によって、デザインされてきた街です。歴史に登場したすべての人々が、公家から民衆にいたるまでが営々として築きあげてきたひとつのシティ・デザインが実体として存在しています。この地こそ、これからのニューライフを語るにふさわしい地と考えているのです。

デザインが生活をクローズアップする会議を、生活者の築いた街において開くことは、生活する人々すべての力によってデザインされていく人間環境とはいかなるものであるかを、現実のレベルで理解していくことにあるのです。

世界の「生活者」を代表する人々による世界的な会議が、この街の大きな活動として結集され、ひとつの刺激となり、また会議中には、コンGRESS・シティとしての姿をあらわすことを、私たちは期待しています。

・ 運動形態としての会議

世界インダストリアルデザイン会議＝ICSID'73 KYOTO は、情報化社会に向けたひとつの試みとして、会議が都市をくるみ込んだかたちで行なわれるという、新しい会議形式の創造をめざしています。

世界会議という貴重な機会が、形式的な代表たちの挨拶に終るのではなく、それぞれに貴重な挨拶の言葉が、貴重な意味を発揮するには、生活者の参加がなければなりません。

生活者に支えられてはじめて、デザイン推進の根本である、すべての人々の理解、そして社会の理解もまた求めうるのです。デザインの分野の会議ゆえに、特にこのことは強く望まれるのです。

そしてこの会議が市民の中に波紋を投じ、その反響が参加者をゆすぶるという相乗作用が、参加者と市民との共通の問題意識、運動への意識となって生まれることでしょう。

- すべてのデザイナーの参画を

この会議は、インダストリアルデザイナーとその関係者を中軸としながら広いジャンルのデザイナーの参画によって構成されることを願っています。むしろ、インダストリアルデザイナーが中軸となることによって、デザインのジャンルの境界がとりはらわれていくことを願っているのです。

- デザインの枠を超えて

従来のデザイン運動は、デザイナー側からの啓蒙活動と、デザイナー自身の職能確立に重きがおかれていました。今私たちは、この自己の職能意識の枠から脱脚して、デザイン自体が社会的諸活動の中心に、運動形態をとって入りこむことを意図しています。それによって、すべての活動に運動形態を与え、運動相互のぶつかりあいの中から、自らの内にもまた外からも、デザインの意識が造像されていく、そういう新しい方法の展開をはかるものなのです。

- 新しい造形運動の姿

これまで、多くのデザイン運動は、明確なかたちでの造形運動を伴っていました。アート・アンド・クラフト運動、アール・ヌーボー、そしてバウハウス運動などにその姿をみることができます。今、ここに企図されている運動は、いわば造形のレベルをこえたところに視点をおき、協力の発見、因と果の相関関係の発見、「もの」とその秩序、それを人間の精神を軸として構築しようという、いわば人間世界の反映としての「物」の世界の造像運動というべきものです。形の域をこえて姿を見出す運動というべきです。

- 世界と日本の新しい関係

このような次元の問題にあっては、先進国と開発途上国とのギャップはありません。私

たち日本が、世界中と対していくために、物質の力以上のものを加味するとき、つねに問題は原点に戻って考えなければなりません。35カ国からのメンバーの参画によって、これらの新しい世界像が築き直されることを願います。

世界中をおろし各民族が、長い歴史の試練を経て築きあげてきた物質と精神とのかゝわりの実体化としてのデザイン、そこに含まれる貴重な意義を積極的に掘り起して、そこから「あたらしい物づくりの方法」によって、より豊かに、より密度の高いものをつくりあげていく方向をみいだすのが、この会議の目的なのです。

- 未来社会に活路をひらく

こゝに現代に築きあげた技術の新しい方向をみいだすでしょう。そして生活者の思想にのっとってものづくりする日本は、文化をうみだし、送り出す国としての、本来の面目を発揮し、文化をもった民族のありかたとして、新しい国家としての日本を実現する道をたどる契機がうまれることゝ私たちは信じます。

このような意味において、この会議の開催が、文化形成を通して、日本が世界との新しい関係を取りむすぶばかりでなく、日本の政治、経済、そして市民生活の進展に寄与することを確信する次第です。

会 議 の 構 成

「世界インダストリアルデザイン会議=ICSID'79 KYOTO」は、「コンGRESS・ホール」、
「コンGRESS・プラザ」、
「コンGRESS・シアター」の三つの施設からなっています。会
議の成果をより大きいものとするために、そして、それをより力強いものとするために、こ
のような新しい会場の構想を計画いたしました。

世界の偉大な設計家によって、これからの未来の方向を示唆し、問題を提示していく「コン
GRESS・ホール」で提示された問題を、参加者自らにそれを個体とし、さらにそれ
をふつてありこ
ることで、世界を
つくりだしていく「コンGRESS・プラザ」、そして会議の
場を、会議を
する都市全体へとひろげる「コンGRESS・シアター」、この三つの施設の中
で会議の進行を
します。

Ⅱ 会 議 の 構 成

- ・ 会 議 の 構 成
- ・ 会 議 の 主 題
- ・ 会 議 の 日 程
- ・ 会 議 の 規 模

会議のこまごま
「コンGRESS・ホール」で提示された問題を、参加者自らにそれを個体とし、さらにそれ
をふつてありこ
ることで、世界を
つくりだしていく「コンGRESS・プラザ」、そして会議の
場を、会議を
する都市全体へとひろげる「コンGRESS・シアター」、この三つの施設の中
で会議の進行を
します。

「コンGRESS・ホール」
「コンGRESS・プラザ」で提示された問題を、参加者自らにそれを個体とし、さらにそれ
をふつてありこ
ることで、世界を
つくりだしていく「コンGRESS・プラザ」、そして会議の
場を、会議を
する都市全体へとひろげる「コンGRESS・シアター」、この三つの施設の中
で会議の進行を
します。

(1) 記 念 講 演

(2) 主 題 討 議

1) 演 講 討 議

2) 演 講 討 議

(3) 全 員 参 加 の 討 議

その方法については次の通りです。

(1) 記 念 講 演

世界の思想の指導的立場にある文化人をゲストに招いて、世界的視野での思想的指針
となる演説を要請しています。

会 議 の 構 成

「世界インダストリアルデザイン会議＝ICSID'73 KYOTO」は「コンgres・ホール」、
「コンgres・プラザ」、
「コンgres・シティ」の三つの構想からなりたっています。会議の成果をより大きいものとするために、そして、それをより力強いものとするために、このような新しい会議の構想を計画いたしました。

世界の偉大な頭脳によって、これからの未来の方向を示唆し、問題を提起していく「コンgres・ホール」、ホールで提示された問題を、参加者自らがそれを個体化し、さらにそれをぶつけあうことによってテーマを掘り下げていく「コンgres・プラザ」、そして会議の輪を、会議を開催する都市全体へとひろげる「コンgres・シティ」、この三つの構想の中で会議は展開されます。

会議のコミュニケーションを円滑に行なうために、会場の装備や環境をととのえ、発言や討議を視聴覚に訴えるため、オーディオ・ヴィジュアル・システムなど有効なメディアを活用いたします。

1. 「コンgres・ホール」

国立京都国際会館を会場として、世界の頭脳たちの鋭い洞察によるテーマの展開、追求が行なわれます。精神をメディアとする人と人との接点の場であります。そして大略、下記の内容で構成されます。

- (1) 記 念 講 演
- (2) 主 題 討 議
 - 1) 基 調 講 演
 - 2) 副 題 討 議
 - 3) 全員参加の討議

その方法については次の通りです。

(1) 記 念 講 演

世界の思想の指導的立場にある文化人をゲストに招いて、世界的視野での思想的指針となる講演を意図しています。

(2) 主 題 討 議

1) 基 調 講 演

主題についての設問と討議課題をうちだします。

2) 副 題 討 議

パネルディスカッション形式とします。

パネリストは会議前に各国より協会、または個人(グループを含む)の2種類の論文を公募し、その論文より、パネリストを選定します。

3) 全員参加の討議

全員参加の討議は下記の2種類の要領で行なわれます。

- (イ) 各副題についてパネルディスカッションの結果を各議長がプログラムを作成し、参加者全員の意見の結果をひきだす。
- (ロ) 参加者のなかで一問一答を試みる。

いわば禅問答に似た形式で端的な自己表現から発言者相互の形而上的表象を導きだします。

2. 「コンgress・プラザ」

世界中から集まる参加者一人一人の自分自身のワークによって、その場を構成します。これは、プラザにおける討論が、現実の場をふまえて展開されることを願うからにほかなりません。そしてホールにおいて提起された問題を、参加者の各々が、それを自らの問題として追求し、それをさらに掘り下げていくのが、この「コンgress・プラザ」です。くもの巣に例えるならばホールでの討議は、中心から周囲へ放射状にのびる糸であり、プラザにおける展開は、その糸を参加者によって、ひとつひとつ結びつけてネットをつくりあげる円周状の糸にあたるともいえましょう。この二つの糸によって、はじめて会議のネットは完全となるのです。そして次のような内容で構成されます。

(1) テーマ、ディスプレイ

会議主題を視覚的に参加者になげかけます。

(2) パーソナル・ディスプレイ

参加者が自分自身のワークを通じて問題を提起します。それによって世界中の現実の問題が一堂に展観されます。

(3) ディスカッション・サークル

参加者相互が「ホール」での討論をさらに掘り下げるもので、この「プラザ」の中心となるものです。

(4) スピーキング・コーナー

参加者が自ら発言し、提案し、主張する場です。

この「プラザ」の目的をはたすため、会場にはふさわしい装置を用意することが求められます。

3. 「コンGRESS・シティ」

ホール、プラザが会議場の中にその場を求めるのに対し、この「シティ」の構想は、それをシティ全体の中に広げようとする考えです。シティの中で、世界中から集ったインダストリアルデザイナーとその推進者たちが交流し、接し合うことによって、この会議に一層のひろがりや深さを与えようとするものです。

そのためにシティの中に適切な場を設けることを計画します。

会 議 の 主 題

主題（仮） 「人の心と物質の世界 = Soul and Material things」

現代のわたくしたちの世界は、大きい壁に直面しています。人間を豊かにしていかななくてはならない物質文明が、そのあまりにも急激な発展のためにさまざまな問題を誘発し、影響を与え、そのとめどもない発展の行く末には、おそれすら感じられております。人々は豊かな物質文明の恩恵に浴しながらも、その心の中には満されない、なにかを感じています。この物質と精神と二つの領域のかゝわり合いは、人間のこれからの行き方を左右する大きい問題であります。

この二つの領域にかゝわり合い、それを結びつけていく役割と責任をもっているインダストリアルデザインは、今こそ、その本来の使命が果されなくてはなりません。主題（仮）として「人の心と物質の世界 = Soul and Material things」をとりあげた意義はこゝにあるのです。

この主題は、下記のような副題のもとにさらに深く討議されていきます。

1. 「人と環境」

1) 都市について

こゝでは公共問題、交通問題、都市生活問題、都市美観問題等が討議対象となるでしょう。

2) 自然について

こゝでは公害問題、自然生態問題、自然美観問題等が討議対象となるでしょう。

3) 世界について

こゝでは世界の人々のこゝろを結ぶインダストリアルデザインの役割、製品にかゝわる国交問題、民族性、宗教性とデザインのつながり等、世界平和に寄与するインダストリアルデザインの価値ある存在を認識することでしょう。

2. 「人と社会」

1) 経済について

こゝでは企業とユーザー、生産と流通、現代感覚と市場等の今日的な、世界共通に起

りつゝある課題について討議されるでしょう。

2) 情報について

こゝでは人とコミュニケーション、人と人との関係、製品のもつ情報性等、人とインダストリアルデザインにかゝわる情報問題の全てについて討議されるでしょう。

3) 科学技術について

こゝでは進歩する科学技術と人のところとの調和、文明の進展、変化、制御、の諸問題について討議されるでしょう。

3. 「人と生活」

1) 労働について

こゝでは労働に対してのインダストリアルデザインのはたらき、その関与の方法と任務について具体的な手段が討議されるでしょう。

2) 余暇について

こゝでは人間生活で重要な余暇のあり方、意味について、インダストリアルデザインの深いかゝわりについて、具体的な効用について討議されるでしょう。

3) 住いについて

こゝでは人々の住生活について、インダストリアルデザインの強い影響についての具体的な討議が展開されるでしょう。

そのほかに、特別課題として、下記のような項目が現代のインダストリアルデザインを考えるうえに、必要、欠くべからざる問題として、とりあげなければなりません。

この主題などについては、実行委員会の正式発足後、その内容委員会（仮称）によって、討議の方法を含めて、検討が重ねられ正式に決定されます。

会 議 の 日 程

- 1973年10月 8日 (月) 於経団連会館 国際会議場
第8回 ICSID総会
- 10月 9日 (火) 同 上
- 10月10日 (水) 移 動 (東京 - 京都)
「コンgres・プラザ —— I」
- 10月11日 (木) 於国立京都国際会館
午 前 開 会 式
基 調 講 演
記 念 講 演
午 後 「人 と 環 境」
「コンgres・プラザ —— II」
特別分科会 災害対策について、ほか
- 10月12日 (金) 於国立京都国際会館
午 前 「人 と 社 会」
「コンgres・プラザ —— III」
特別分科会 身体障害対策について、ほか
午 後 「人 と 生 活」
特別分科会 開発途上国振興対策について、ほか
- 10月13日 (土) 於国立京都国際会館
午 前 会 議 総 括 報 告
午 後 閉 会 式

会 議 の 規 模

会議の参加者は次のように予定しております。

総会		会議	
参加国	39カ国	外国からの参加者	400名
参加者	300名	国内からの参加者	1,200名
		(合計)	1,600名

世界インダストリアルデザイン会議が、1965年、日本で開催されることとなるまでは、これまで1955年以來5年間にわたって、下記のような経過をへてまいりました。

- 1965年 ワシントン総会において、日本で会議開催の意志を表明した。
- 1967年 ロメフ総会では、日本開催についての具体的提案を行なう。
- 1968年 日本開催が内定

Ⅲ 会 議 の 準 備

- ・ そ の 準 備
- ・ そ の 組 織
- ・ そ の 予 算

1969年 10月 JIDAはICSID準備委員会を設け、以後4次にわたって委員会
1970年 6月 グレゴリー・コックレルと東京において、通産省、IPRI、JIDPO、

- ・ JIDAの準備委員会を組織した。
- 1971年 1月 IPRI、JIDPO、JIDAによって、ICSID日本準備委員会を
設立、日本開催を協議して、世界インダストリアルデザイン
会議の開催地を決定した。

1971年 1月 通産省、IPRI、JIDPO、JIDAにより、世界インダ
ストリアルデザイン会議開催についての、第一次基本案を検討し
た。

1971年 10月 パリセロナ総会で、正式開催提案と新ロゴマークを発表、日本開
催が正式に決定された。
ICSID理事会メンバーにJIDA 栄久理事理事が加わる。

1971年 12月 第6回JIDA '71 デザイン会議において、パロセロナ総会の報告
を行ない、日本開催を公決した。
IPRI、JIDPO、JIDA三者の代表者によって、ICSID日本準
備委員会および、同計画委員会が発足した。

1972年 1月 デザインイブにおけるICSID理事会において、会期などの基本原
案を採決し決定した。

今後の準備活動の展開は、大略以下のように進められましたが、日本の地理的条件などから、
式場活動は特に重要視されました。

そ の 準 備

世界インダストリアルデザイン会議が、1973年、日本で開催されることになるまでには、これまで1965年以来6年間にわたって、下記のような経過をへてまいりました。

- 1965年 ウィーン総会において、日本で会議開催の意志を表明した。
- 1967年 オタワ総会では、日本開催についての具体的提案を行なう。
- 1969年 9月 ロンドン総会で、1973年 日本開催を提案し、日本開催が内定した。
- 12月 JIDAはICSID 準備委員会を設け、以後4次にわたって委員会組織の拡大を行なう。
- 1970年 8月 クレソニエール事務総長と東京において、通産省、IPRI, JIDPO, JIDA の間で日本開催について協議した。
- 11月 IPRI, JIDPO, JIDA三者によって、ICSID 日本協議会を設立、以後定例連絡会を開催して、世界インダストリアルデザイン会議についての討議を開始する。
- 1971年 7月 通産省、IPRI, JIDPO, JIDA により、世界インダストリアルデザイン会議開催についての、第一次基本原案を検討した。
- 10月 バロセロナ総会で、正式開催提案と歓迎メッセージを発表、日本開催が正式に決定された。
- ICSID理事会メンバーにJIDA 栄久庵理事長が加わる。
- 12月 第6回JIDA'71 デザイン会議において、バロセロナ総会の報告を行ない、日本開催を公表した。
- IPRI, JIDPO, JIDA三者の代表によって、ICSID 日本準備委員会および、同計画委員会が発足した。
- 1972年 1月 エディンバラにおけるICSID理事会において、会期などの基本原案を提案し決定した。

今後の準備活動の展開は、大略以下のように進められますが、日本の地理的条件などから、広報活動は特に重要視されましょう。

- 1972年 5月 政府補助金関係の諸検討。会議内容の具体的検討に入る。内容検討のための顧問団を設ける。広報計画の検討。
運営会、実行委員会の設立準備に入る。
政府補助金関係の手続の実行。
- 6月 実行委員会、事務局の設立。海外アピール、会議報の発行準備。
- 7月 海外招聴者の立案、打診開始。運営会の設立。
- 8月 会議報第1号発行。一般へのアピール開始。
- 9月 会議開催最終計画完成。
- 10月 第1次サーキュラー作成発送。海外アピールを開始する。
参加登録開始。
関連して行なう事業の企画、内容の検討。海外招聴者の確認、その内容の依頼。
募金活動の開始。
ICSID理事会を日本で開催。
- 12月 宿泊施設などの第1次調整。配布印刷物の準備開始。
- 1973年 1月 デザインイヤー開幕。
- 2月 歓迎プログラムの交渉開始。配布資料の準備。
- 5月 参加登録中間チェック。設営プランの立案。
- 6月 募金活動の活潑化。
- 7月 会議の直接準備期に入り、事務機構の強化。
- 8月 参加登録締切。設営プランの完成、制作開始。
- 9月 配布印刷物、資料完成。会議運営機構の編成。
- 10月 会議開催。
- 12月 会期中の報告書類のチェック。
デザインイヤー閉幕。
- 1974年 1月 会議処理委員会発足。
- 2月 会議報告書の作成。
- 3月 国内外反響のとりまとめ。
- 8～10月 公式記録書の完成。

そ の 組 織

1. 「世界インダストリアルデザイン会議日本運営会」(仮称)

会議の準備、開催、運営とその報告、あるいはその成果の普及徹底のために、財団法人日本産業デザイン振興会内に「世界インダストリアルデザイン会議日本運営会」(仮称)を設置し、会議運営の総括調整を行ないます。

「日本運営会」は会長1名、副会長 名、理事および評議員若干名、監事2名をもって構成します。

「日本運営会」には、内容検討その他諸検討の一層の充実をはかるため、国内外の有識者をもつて構成する「顧問団」を設けます。

2. 「世界インダストリアルデザイン会議実行委員会」(仮称)

会議の組織化、テーマの選択、討議の方法、日程の検討、その他会議運営のための諸計画を展開するために「世界インダストリアルデザイン会議実行委員会」(仮称)を設け、通産省製品科学研究所、(財)日本産業デザイン振興会、(社)日本インダストリアルデザイナー協会および関係各分野よりの若干名をもって構成します。

なお本委員会は、準備の進捗にともない、漸次その形態と拡がりを実行してゆく形をとります。

「実行委員会」は実行委員長1名、副委員長 名、専門委員長 名、専門委員若干名をもって構成します。

実行委員会の円滑な運営をはかるため、実行委員長および専門委員長による「委員長会議」を設けます。

会議運営、国内組織の強化、調整、その他の諸検討の一層の充実をはかるため、国内各デザイン団体関係者による「相談役」を設けます。

計画の具体的展開のため、以下のような専門委員会を設け、実行計画の立案準備を行ないます。

内容委員会	総務委員会
財務委員会	広報委員会
組織委員会	設営委員会
渉外委員会	事業委員会

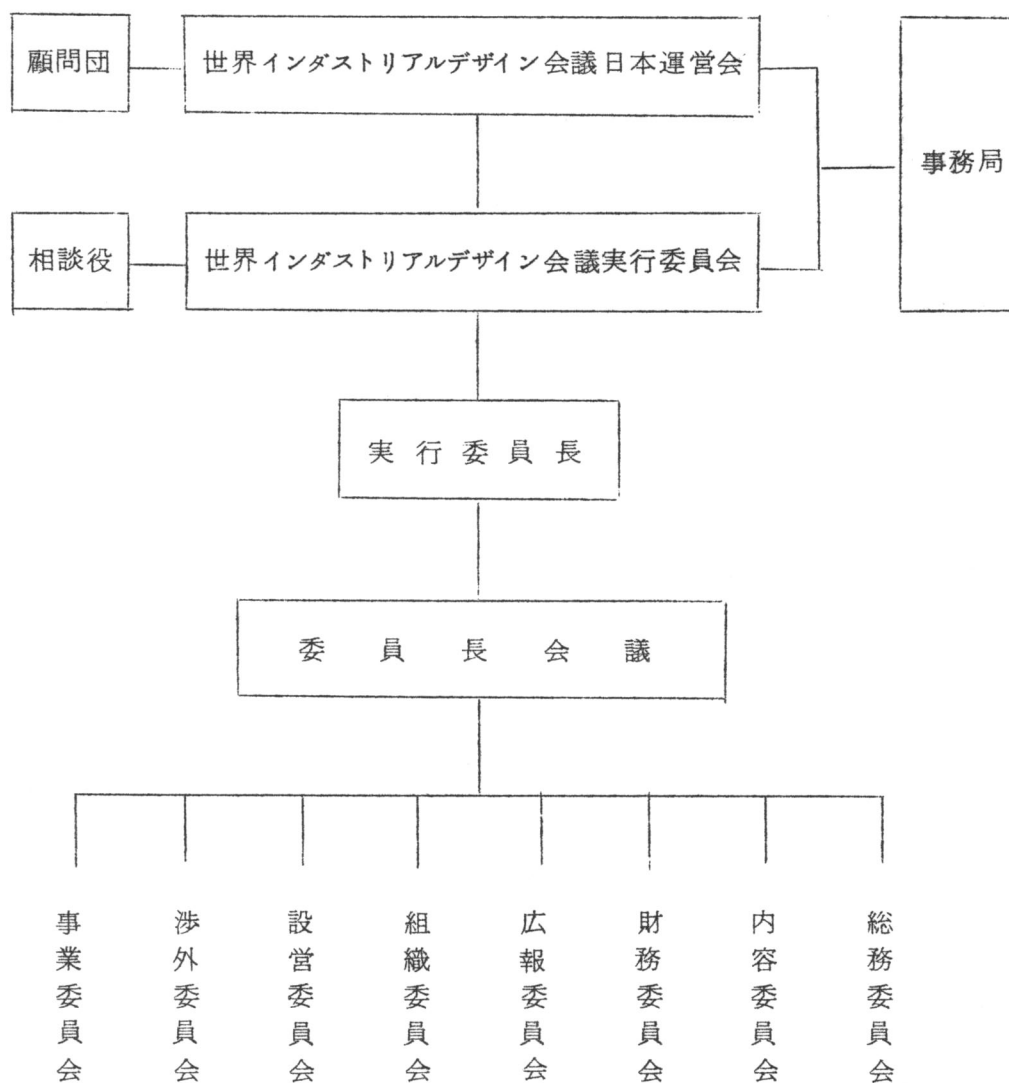
会議期間中は、専門委員会のほか臨時職員などをもって「会議運営機構」を編成し、会議運営処理にあたります。

会議終了後は、これら専門委員会は「会議処理委員会」に切換えます。

「日本運営会」「実行委員会」を補佐し、その相互の円滑な運営とその業務の進行展開のため「事務局」を設けます。

「事務局」は、事務局長1名、次長 名、事務局員若干名をもって構成します。なお、「事務局」は、準備の進捗にともないその体制を強化します。

世界インダストリアルデザイン会議運営組織（案）



そ の 予 算

会議の資金は、参加者の参加登録費が重要な財源であるのはいうまでもありませんが、しかし、それをもってすべてをまかなうことは不可能であり、かなりの部分を民間からの寄付金にまつものであり、また相当額の政府補助金を支えとするものであります。

したがって、その経費はつとめて冗費をはぶき、効率よく運用していかななくてはならないのは勿論のことであり、予算の総枠は極力きりつめていかななくてはならないのでありますが、この会議が期する成果をあげ、それをひろく国内外に反映させるために、ある限度というものがあるのはいなめません。

これまでの同程度の規模の会議の予算決算状況を調べ、またこの会議の特殊性 ——
例えば、オーディオ・ビジュアル・システムの活用、配布物のビジュアルライズ化など ——
を考慮に入れて予算計画を行ないます。

その細部は詳しい検討が必要であり、会議の形態、参加者の動向などによって多少の変動はあると思われます。

会議開催の意義をより広く反映させ、会議をより成功へと導くため、会議の広報誌「世界インダストリアルデザイン会議・会議報」を発行します。これは本会議の運営会、実行委員会の公式刊行物として、会議開催の意義やその準備状況を、加えて関係方面はじめ一般に報告通知するとともに、関心を喚起することも目的とします。また、この会議報は、英、仏語で、国内外での広報活動に活用されます。

IV 会 議 の 広 報

- 。 会 議 報
- 。 会 議 資 料
- 。 議 事 録
- 。 公 式 記 録 書
- 。 そ の 他

議 事 録

会期中の討論は原則として、速記と録音によって記録し、当日の討論開始までに整理された印刷物として、参加者に手渡さなければなりません。

また、その要点は取りまとめられ、プレス・シートとして、新聞などの報道関係者に配布されます。

会議開催の意義をより広く反映させ、会議をより成功へと導くために、会議の広報誌「世界インダストリアルデザイン会議・会議報」を発行します。これは本会議の運営会、実行委員会の公式刊行物として、会議開催の意義やその準備状況を、刻々広く関係方面はじめ一般に報告周知するとともに、関心を喚起することを目的とします。また、この会議報は、英、仏訳され、ひろく海外での広報活動に活用されます。

会 議 資 料

会議が短い期間に充実した内容となるためには、討議される論点が参加者相互の間に充分理解され明確になっていることが重要であります。

この会議では事前の連絡を活用し、資料を事前に参加者に送付し、研究をねがっておけるようにしたいと考えております。

会議の公用語は、日、英、仏の3カ国語でありますので、これらの資料はもちろん3カ国語で用意されなければなりません。

議 事 録

会期中の討議は原則として、速記と録音によって記録し、翌日の討議開始までに整理された印刷物として、参加者に手渡さなければなりません。

また、その要点は取りまとめられ、プレス・シートとして、新聞などの報道関係者に配布されます。

公 式 記 録 書

会議終了後、できるだけ早く会議の公式報告としての記録書を編集し、参加者、寄付者、その他関係者に頒布いたします。

この記録書には、会議の討議内容をはじめ、準備の経過報告、参加者、関係者の名簿、会議の決議にもとづくアピールなど、会議に関するすべてが集大成されます。

そ の 他

ポスターなど、ヴィジュアル・メディアを通じての広報活動とともに、国内外のマス・コミュニケーション諸機関や、デザイン関係ジャーナリズムと密接な提携をとって、会議関係はもちろん、ひろくデザイン分野の広報活動を強力に展開します。

世界インダストリアルデザイン会議を開催することは、単に参加者のみでその成果を反映するにとどまらず、デザイナーの基幹事業として、デザインの関係分野は当然のこと、ひろく企業や一般市民にまで、改めてデザインに対する正しい関心と、理解とを深める役割をはたすことが求められます。そのためにも、会議の広報活動とともに、それに関する関連事業が重要な意義を有していると考えます。関係各分野およびデザイナー連合計画本部（仮称）と協力し、その目的達成のために有効な事業を展開したいと考えます。

V 会議の関連事業

- ・ 展 示 会
- ・ セ ミ ナ ー
- ・ 記 念 出 版
- ・ そ の 他

1. 「日本の伝統」展

日本の伝統的技法を広いアングルから探り、その歴史的意義を明らかにし、日本人のデザインする力を強めて考えようとするものであります。海外からの会議参加者に向けて、日本インダストリアルデザインの背景をもとめる一助となりましょし、国内参加者、一般市民に対しても、自分たちのもつ伝統について考える機会を提供するでしょう。

2. 「世界の学生デザイン教育」展

学生や、若いゼネレーションの動きは、インダストリアルデザインの世界においても、大きい意味をもつものです。それは単に現代の動向を明らかにするだけでなく、未来の動向に対する動きを暗示するものであります。そういう意味で、世界中のデザイン学生（若）の年代の現実の動きを一堂に集めて展示することは、大きい意味をもつといえます。これは単に学生や教育界に留めてだけでなく、デザイナーおよびそのほか、市民にいたるまで注目すべきものとなりましょし。

世界インダストリアルデザイン会議を開催することは、単に参加者のみにその成果を反映するにとどまらず、デザイナーの基幹事業として、デザインの関係分野はもちろんのこと、ひろく企業や一般市民にまで、改めてデザインに対する正しい関心と、理解とを深める役割をはたすことが求められます。そのためには、会議の広報活動とともに、それに関する関連事業が重要な意義を有していると申せます。関係各分野およびデザイナー運動計画本部（仮称）と協力し、その目的達成のために有効な事業を展開したいと考えます。

展 示 会

本会議の関連事業としての展示会として三つの計画があります。

1. 「会議テーマ」展示

ここでは、現在のインダストリアルデザインおよび、それをとりまく諸問題を取りあげ、本質的問題提起を行なおうとするもので、この会議の方向を視覚的に参加者にアピールしようとするものです。

2. 「日本のかたち」展

日本の伝統的かたちを広いアングルから探り、その現代的意義を明らかにしたのち、日本人のデザインする力を改めて考えようとするものであります。海外からの会議参加者に対して、日本インダストリアルデザインの背景をもとめる一助となりましょうし、国内参加者、一般市民に対しても、自分たちのもつ伝統について考える機会を提供するでしょう。

3. 「世界の学生デザイン教育」展

学生や、若い世代の動きは、インダストリアルデザインの世界においても、大きい意味をもつものです。それは単に現代の問題を明らかにするだけでなく、未来の動向に対する動きを暗示するものであるからです。そういった意味で、世界中のデザイン学生の70年代の現実の動きを一堂に会して展示することは、大きい意味をもつといえましょう。これは単に学生や教育界に対してだけでなく、デザイナーおよびそのほか、市民にいたるまで注目すべきものとなりましょう。

セ　　ミ　　ナ　　ー

世界中のインダストリアルデザイナーおよびインダストリアルデザイン関係者が、このような規模で日本に集まることはもちろんはじめてのことです。世界のインダストリアルデザインのトップの頭脳が来日する機会に、日本の各界におけるインダストリアルデザインに対するより高い関心と理解を深めるために、社会の各層を対象としたセミナーを計画したいと考えます。これは単にデザイン界のみでなく、日本の各界の今後の方向に必ずや大きい影響を与えるであろうことを信じております。

記　　念　　出　　版

この会議の開催を記念し、これまでの日本インダストリアルデザイン発展の足跡と現在の状況をまとめた出版物を刊行したいと考えます。本会議が日本のインダストリアルデザイン史上で重要な意味を有するよう、日本のインダストリアルデザインの発展のあとをふりかれり、これからの方向をさぐる、この出版の意義ははなはだ大きいと考えます。

そ　　の　　他

その他、インダストリアルデザインの正しい啓蒙、普及活動のために、新聞、雑誌、テレビ、ラジオ、などマス・コミュニケーション諸機関と協力して、ひろく一般市民を対象にした諸活動を展開します。

(以　上)

ICSID 日本準備委員会

委員長 柴久庵 憲 司

委員 赤川 直 亮

” 石田 幸 一

同上計画委員会

委員長 木村 一 男

委員 吉岡 道 隆

” 西本 芳 雄

” 那賀 清 彦

” 来栖 義 郎

